

「シンパシーの電氣的な絆」と19世紀的な「視」のありよう

庄 司 宏 子

人間の視線が「^{ヴィジョン}視覚」と「^{ヴィジュアルリテイ}視覚性」の二つの要素から構成されるものであるなら、すなわち「見ること」が身体的なメカニズムに支えられたものであると同時に「何をどのように見るのか、どう見ることが可能なのか、あるいはどう見ることを強いらられるのか、われわれは目に映ったものあるいは映らなかつたものをどう捉えたのか」という、優れて社会的・歴史的営みなのであるとするなら（フォスター ix）、そうした視のありようの一例を1844年3月にフィラデルフィアの*Dollar Newspaper*に掲載されたEdgar Allan Poeの短編“The Spectacles”の次の一節に認めることができるだろう。

何年前か、「一目惚れ」（“love at first sight”）という概念を揶揄することが時代の風潮であったが、深くものを感じるたちの人々は言うに及ばず知に勝る人々の間でもそれが存在することは肯首されているのである。感応磁気術（ethical magnetism）あるいは磁気感応術（magneto-aesthetics）と呼ばれる最近の発見は、最も自然で、従って最も真実にして強烈な人間の感情とは、まるで電氣的な感応（electric sympathy）の如く心に湧き起こるものであり、換言すれば最も鮮やかで最も永続的な心の枷とはまなざしの一撃によって打ち込まれるものだと説いている（688）。

ここには「見ること」をめぐる19世紀的な視の制度、その制度の中にある認識論的主体のありようの一端が現れているといえるだろう。ポー作品に現れた視の制度ないし視のパラダイムは、19世紀的な視覚的事実とわれわれをかりうじて結びつけると同時に遠ざけもする「感応磁気術」「磁気感応術」「電氣的な感応」という謎めいた言葉によりその存在を顕現させる。そうした言葉は異なる時代、異なる視の制度の中にある者にとって眩惑的な、19世紀の視の制度に固有な修辭や表象である。そうした歴史の微光に包まれた言葉を手がかりにポーが描いた視覚のありようを歴史の中に位置づける作業を以下に試みたい。

ポーの「眼鏡」の冒頭に現れた上記の引用部では、視線がもたらす人間の心理的拘束（つまり「一目惚れ」）、両者の関係を保証する「磁気感応術」なる知、その視線のアナロジーとしての「電氣的な感応」といった概念が提示される。22歳の主人公 Napoleon Bonaparte Simpson (Napoleon Bonaparte Froissartから改名)は、劇場の観客席にみとめた「美女」Madame Lalande (Eugénie Lalande)に「一目惚れ」をする。その様子の詳しい描写は次の通りである。

説明のできない魂と魂との「磁氣的な (magnetic)」感応 (sympathy) としか言い表しようのないものが私の眼ばかりか私の思考や感情までも私の目の前にいるこの賛美すべき対象に釘付けにするのであった。私は見た——感じた——知ったのだ、私が深く、気も狂わんばかりに、否応なく恋してしまったことを——しかもそれは恋する相手の顔を見る前に起こったのである。この感情は私を消耗させるほどに強かったので、未だ見ぬその顔立ちが平凡なものだと判明してもいっこうに減じることにはなかったであろう。唯一の真実の愛、一目惚れの性質はそれ程までに尋常ならざるもので、それはそうした愛をつくり出し制御すると思われている外的な条件とはほとんど無関係に起こるのである。(690、傍点引用者)

主人公は自分の「一目惚れ」が相手の外見など「外的な条件」とは関わりなく生じたものであるとし、「相手の顔を見る前に起こった」ものであると言う。そうであるならば彼の恋は“love at first sight”ならぬ“love before first sight”というわけだが、そうした心理的拘束をもたらすのが「磁氣的感応 (シンバシー)」なのだとする。「電気」あるいは「磁気」という形容を伴って語られることの多いシンバシーはポーやホーソン、メルヴィルなどアメリカ・ルネサンスの作家を生み出した19世紀半ばの時代を表すキーワードといえるが、そのシンバシーが視覚や視覚性の領域にも入り込み、見ることあるいは見ることを阻む時代の視のありようをポーのこの短編は垣間見せている。

シンバシー言説は、奴隷廃止運動をはじめとする様々な社会改革運動、エリート主義的なフェデラリズムから職人や商人など中間の階級を中心に台頭する統治論としてのデモクラシー、はてはメスメリズムまでも吸い寄せるが、ポーやホーソンの小説もその言説の文化に参与し、その散種に関わって

「シンパシーの電氣的な絆」と19世紀的な「視」のありよう

いる。ポーの作品を離れてこの時代のマトリックスともいえるシンパシー言説が、いかにこの時代に産出される国家論から演技論、文学までのさまざまなテキストに棲みついていたか、その様子を同時代のさまざまなテキストの中に追ってみよう。

“Electric Chain of Sympathy”——電気のメタファーで語られるシンパシー

元来、人間の身体の器官と器官をつなぐ神経の連結を意味する語であったシンパシーは、18世紀末から電気や磁気との連想を帯びるようになる。1830年代から40年代にかけて時代を牽引する主たるメディアであった雑誌に掲載された奴隷解放運動やアメリカ的なデモクラシー、さらにはテキサス併合など時代の主要なトピックを扱った記事の中に現れるシンパシーという語は、この概念が多種多様化する人々の間に感情の交流を開き、社会の中を循環する力のようなものとして想定されていたことを窺わせる。編集者としてあるいは自身の短編の発表の場として雑誌文化に深く関わったポーやホーソンはこうした言説の中に身を置いていた。

外交や政治、説教集や航海誌から小説に至るまで、一見何の脈絡もなく互いに異質な言説空間の中で同じフレーズが繰り返し現れるとき、それは時代を共有することによる偶然の産物として到底片付けることのできない、何らかの時代精神、時代に蠢いていた動的な無意識を吸い寄せていると見るべきであろう。“Electric Chain of Sympathy”はそういうフレーズとして19世紀半ばのさまざまな言説のインターテキストに浮遊している。ホーソンが1843年の*The United States Magazine and Democratic Review*の4月号に発表した“The Procession of Life”に現れた「シンパシーの電氣的な絆」を見てみよう。

天賦の知性の持ち主が高貴なる同胞となるさまを思い描いてみよう。

なんということだろう、そこでは伝統的な社会階層などまるで掴もうとするその手のそばから霧散するかすみの如きものとなる。ロード・バイロンやロバート・バーンズが生きていたら、前者は先祖伝来の邸からいやいやながらも先年にわたる栄誉を振り捨て、鋤もつ手のかたわら不朽の詩を生み出した雄々しき農夫（注：バーンズ）の腕を取るだろう。詩人は生まれる——壮麗な屋敷からも、農夫の炉辺からも、山小屋からも、宮殿からも、

会計士の部屋からも、店からも、村からも、都市からも、高貴な人々の住まう御殿からも、貧者の荒ら屋からも。詩人には普遍的な気質がまるで電氣的なシンパシー (an electric sympathy) の如く流れている。(211、注、傍点引用者)

人生とは元帥の如き差配人が取り仕切る祭りの行進、あるいは葬列のようなものであり、彼の原則に従って人間はその社会的階層を決められているのだというホーソンの言辭のそばに、同時代のユニタリアン派の牧師の説教からの一節を置いてみよう。

われわれはこの利己的な世の中に生まれおちて成長し、世間的な処世訓により程度の差はあれ教育を受けるものの、われわれのうち誰一人として人間の本質の聖なる絆をそうあるべき程には感じていないのであり—、われわれの精神がまるで電氣的な絆 (an electric chain) に触れるが如く人間の絆に触れて震えるとか、聖なる人間のシンパシーの紐帯 (the bands of holy human sympathy) の内にあることを感じるとか、全ての人間の思考、欲望、欲求、弱さ、希望、喜び、悲しみをわれわれ自身のものとして親しく混じり合い、分かち合うということにはなっていないのである。(デューイ74、傍点引用者)

共同体とは個々の成員を超えた有機的全体であるとして普遍的善を唱える伝統的なフェデラリズムの時代から、急速に拡大し異質化する19世紀の半ばのアメリカ社会において、利害も目的も異なる雑多な集合体を束ねる力としてシンパシーが新たな価値を持っていたこと、詩人とはそのようなシンパシーの資質の才に恵まれた者と考えられていたことが窺える。ホーソンとデューイ牧師が共に口にする「電氣的な絆」は二人が同時代のシンパシーの言説を共有していたことを示している。伝統的な社会の階層区分が後退し、新たな階級区分が取って代わろうとする時代に、互いに無関心で異なる利害を有する人々をどう束ねていくのか、ホーソンとデューイ牧師はそうした時代の関心の中に身を置いていた。生まれも階級も関心も異なる人と人との間にいったん「シンパシーの電氣的な絆」が生まれるや、それまで無縁だった人々の間に連帯が生まれ、「心を傾注し、以後耳目に触れるものすべてが新鮮

「シンパシーの電氣的な絆」と19世紀的な「視」のありよう

に感じられ、この人をよく知りたい、いやすでに知っているのだ、—彼のことを語りたい、彼に関わることに全てに興味を掻き立てられるようになる。彼は病気ののだろうか、いや健やかなのだろうか？—いま何処にいるのか、ここか、それともあちらか—ごく日常的なことが大いなる関心事となるのである、いったん（シンパシーの電氣的な絆によって）彼と結びついた瞬間に。」

（デューイ 74）ホーソンはこうしたシンパシーの電氣的な鎖から追放された人間の孤独もまたその小説に描いている。¹

シンパシーが新たな社会の紐帯を意味する一方で、職人や商人階級が中間層として台頭し、かつてない勢力を市政に及ぼすようになったボストンで牧師の修養時代を送ったエマソンは、そうした社会の雑多な成員の間に通う「シンパシーの電氣的な絆」に不安を感じ、それを次のように吐露している。

時代は連綿と続くが、その時々の人心を忠実に反映した教育制度の中に時代精神が体现される以前に、その時代を決定づける調子といったものが喧伝されるきらいがある。であるからある時代の精神を語ろうとすれば、矛盾の誹りを免れるとも遅きに失した一般論にならざるを得ないのかもしれない。人間があまりに密接に結びつき互いにひしめき合って暮らしているのだから、強烈な感情とか目立つ人間というような存在がその強い感染力を無限に及ぼすことがない状態などということはおよそありそうもないことだ。さように「われわれが閉じ込められている」シンパシーの「電氣的な絆」は万人に興奮を伝達するという役割を忠実に遂行しているのである。気質や人種によらず人間は集合体としての人間の動向に敏感で、大海のしづくは一滴一滴取り分けることはできてもいつしかまた大きな水のうねりの一部となってしまうのである。（254、傍点引用者）

フェデラリズムの時代に幼少期を過ごし元来保守的なエマソンは、有徳の士が及ぼすシンパシーの絆以外にも、シンパシーはその自然の本質によって悪徳をもたらす伝染病のように人間の間を循環してしまうことを恐れる。いかにシンパシーの感染力から遠ざかるか—エマソンにとって、総じて人心が傾きがちな虚飾や墮落を伝染させるシンパシーの悪しき循環から身を引き離し、他人の迷妄からの影響を逃れるために、「孤独」(solitude)が大いなる価値を帯びるのはそのためである。

スペクタクルな眼鏡

ポーの「眼鏡」に話を戻そう。極度の弱視にもかかわらずその恵まれた容姿を損ないたくないために眼鏡を拒むシンプソン青年は、「電氣的シンパシー」によって劇場で出会った「美女」（実は齢82になる自分の曾曾祖母）に魂を射貫かれ「一目惚れ」をする。「眼鏡」は、シンパシーという時代精神が肉体のメカニズムに先立って人間の視線のありようをも支配してしまうという事態をグロテスクな笑劇にし、シンパシーが席卷する時代文化をパロディーにした短編である。ポーは曾曾祖母から主人公にいたる四世代の一族の繋がりを母方の直系（“direct line of descent”）の長女による早婚の繰り返しとし、シンパシーが働きやすい状況を設定する（シンパシーは同胞、地縁、血族の間に最も強く働くと考えられていた）。さらにそれを強調するかのように曾曾祖母からシンプソンに至る四世代にMoissart、Voissart、Croissart、Froissartと似た名前を反復させる。実際、生物的な人間の眼差しに先行するシンパシーの力は、シンプソンと曾曾祖母との間には働くが、曾曾祖母の二番目の夫の遠い親戚に当たるより若く美しいMadame Stephanie Laladeとシンプソンとの間には働かないのである。この一見荒唐無稽な早婚と名前の反復は、シンパシーが他者と他者を結びつける支配的な原理として社会を循環するその運動、自明なものとして無意識化されることで見えにくくなってしまふその流れを可視化する役割を果たしている。ポーの「眼鏡」は、視覚が圧倒的な地位を占め、写真術による複製技術がそれを後押しする近代資本主義が到来する前夜の視のありようを垣間見せているのだ。そこでは見る主体が超越化され、見られる客体が受動化されて遠近法的な視覚のヒエラルキーの中に配置されることはなく、見る者と見られる者は共にシンパシーという“charmed circle”の中に幽閉されているのである。

しかしながら「眼鏡」はシンパシーによる視覚の専横のみを描いているわけではない。曾曾孫のあまりの愚かしさに一計を図ったランド夫人はシンプソンに“ocular assistant”つまりはタイトルの「眼鏡」をプレゼントし、それをかけて世界を眺めるよう強要する。若い方のランド夫人、ステファニー・ランドの夫となった主人公は「もう永遠に恋愛沙汰とはおさらばをし、今後は決して眼鏡を手放すまい」（707）と述べて物語は閉じられる。眼鏡という視覚補助具によって強化される代替的な視線のあり方をシンパシー的な視

「シンパシーの電氣的な絆」と19世紀的な「視」のありよう

線と対比させて、ポーが「眼鏡」が代表する新たな視とそれが可能にする新たな認識モデルを提示することで、シンパシーが構築してきた支配的慣習の脱中心化に着手しているのか、ただそれを攪乱しているだけなのかは定かではない。しかしポーの時代はダゲレオタイプに始まりカロタイプ、ステレオスコープ、ジオラマ、パノラマ等の光学器械の登場とその大衆化の時代であった。ポーが物語のタイトルに掲げた「眼鏡」^{サ・スペクタクル}とそれが象徴する、よりよく視るため、スペクタクルをつくりだすための視線のテクノロジーの産出という系列に現代の視覚文化が連なっていることだけは確かである。

注

1. 例えば、“Ethan Brand”のEthan Brand, *The Scarlet Letter*のHester Prynneの孤独はこうしたシンパシーの電氣的紐帯から自らの意志により、あるいは罪の徴によって放逐された者の孤独として描かれる。イーサン・ブランドは“the magnetic chain of humanity” (99) を失い、ヘスタ・プリンは胸につけた緋文字により“she was banished, and as much alone as if she inhabited another sphere, or communicated with the common nature by other organs and senses than the rest of human kind”(84)となる。

引用文献

Dewey, Orville. “Moral Views of Commerce, Society, and Politics. In Twelve Discourses.” Cited in “Literary Notices.” *The Knickerbocker* 12 (1838): 74-76.

Emerson, Ralph Waldo. *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson: 1822-1826*. Ed. William H. Gilman. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard UP, 1961.

Foster, Hal, ed. *Vision and Visuality: Discussions in Contemporary Culture*. New York: New Press, 1999.

Hawthorne, Nathaniel. “The Procession of Life.” *Mosses from an Old Manse. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. X. Ed. William Charvat et al., Columbus: Ohio State UP, 1974. 207-222.

庄司 宏子

———. “Ethan Brand.” *The Snow Image and Uncollected Tales. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. XI. Ed. William Charvat et al., Columbus: Ohio State UP, 1974. 83-102.

———. *The Scarlet Letter. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. I. Ed. William Charvat et al., Columbus: Ohio State UP, 1971.

Poe, Edgar Allan. “The Spectacles.” 1844. *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe*. New York: Penguin Putnam, Inc., 1982. 688-707.